審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　桐浴邦夫

この論文は、「近代数寄屋建築とは何か」という問いかけに答えるべく行われたものである。具体的には明治期に焦点を当て、その数寄屋にとっての不遇なる時代からの脱却こそが近代への大きなステップと捉える。そしてここで最も重点を置いているのは、そのサブタイトルにもあるように、「公」という意識である。当初においては不十分ではあったが近代都市へのプロジェクトとしての公園に設置された数寄屋建築、殖産興業の一環として設置された博覧会における数寄屋建築、これらの数寄屋建築は、国家が近代化へと進む方向において、日本という国の同一性を顕示するものとして位置づけることができよう。またそれは「公」であったが為に、その存在は広く知られるところとなり、後に展開する数寄屋建築に大きな影響を与えた。

本研究は、近代数寄屋建築という未だ漠としており、またさまざまな要素が複雑に絡まりあっている事象を取り上げることから、これまでの建築史研究においてあまり一般的でない捉え方あるいは手続きによっている部分も多い。ここでの新しさは次の点にある。

茶の湯にとって、明治の初め頃は決して幸福な時代ではなかった。大きく体制が変わり、多くの茶の湯を支えてきた人々が力を失い、また人々の眼差しは海外からもたらされた新しい文化に注がれ、在来の日本の文化に対しては冷淡であった。このような状況から抜け出し、茶の湯がその活力を取り戻すのは、一般には、明治の中頃あるいは終わりの頃になってからであると考えられてきた。しかしここでは明治期における数寄屋建築の新たな動きが、明治10年代に展開されることに注目する。とりわけ紅葉館と星岡茶寮はこれまで料理店としての把握が一般的であったのだが、ここでは公の要素を持つ社交施設として扱い、近代数寄屋建築の枠組みの中で捉えている。そしてこれまでの捉え方とは逆に、数寄屋建築の近世における閉鎖性に比較して、その開放的な性格を強調する。

また一般的に、建築の歴史においては建物の新築を重点的に扱うものであり、あるいは時には再建にも注目が集まることもあるが、移築に焦点が当たることは希であるといえよう。本研究において扱った博物館あるいは博覧会において設けられた数寄屋建築は、その多くが移築されたものであり、これまでその創建当初に注目が集まることがあっても、この移築された時代としての扱いは希であった。しかしここでは移築、あるいは用途の変更という行為についても取り上げ、この時代の中の動きとして吟味するものである。

移築されたものは、それまでのその建築が辿ってきた経歴も重要な要素となる。本研究においては数寄屋建築の伝来についても扱っているが、明治期においては個々の伝来について必ずしも実証的に検証されているわけではなく、その意味から現在から見れば誤った認識で捉えられていたものも多い。しかしながらここでは当時の認識でそれぞれの建物を捉えることを試みている。

さらにメディアとの関わりも重要な点である。近世の数寄屋建築は私的で奥向きに設けられるのが常であり、一般に広く知られることはあまりなかったと考えられる。しかしここで扱った個々の数寄屋建築は公の場所に設置されたこともあり、その認識は前時代に比べ広範に及ぶものと考えられる。そしてそれらがメディアの対象物となるのであった。新聞における記事やそれに関わる出版物が世に送り出されるのであった。また博物館あるいは博覧会はそれ自体一つのメディアであり、これらメディアによって発信されることにより、おそらく飛躍的に多くの人々にその存在を認識せしめたものと考えられる。

本研究の構成の概要は下記である。

第１章では、明治期における東京府の公園に観察するのであるが、特に社交施設が設立されるに至った場としての公園に着目するものである。明治期の東京府の公園について、その発生時より凡そ10年間に亘る状況を観察し、園地においてさまざまな施設が設置されるに至った経緯を考察する。これは紅葉館と星岡茶寮の成立に至る要因として東京府の公園経営が深く関わってきたと考えられるからである。

第２章では、1881(明治14)年に誕生した社交施設である紅葉館について検討する。先ず最初に概要を示し、その設置された芝公園の状況を観察する。そしてそこに社交施設が設けられる状況、その拡張していく様を明らかにする。またその後の展開についても触れ、いわゆる社交施設から料理店への転換についても観察を行う。

第３章では、1884(明治17)年に茶の湯の施設として設置された星岡茶寮について検討する。ここでも前章と同じく、その概要を示し、その設置された麹町公園の状況、そこにこの施設が設置されていく経緯、そしてその後の展開について観察する。特にここでは設立に至るまでの数葉の略図が遺されているのであるが、これらを分析し設立に至るさまざまな状況について考察する。

第４章は、明治期の博物館あるいは博覧会における数寄屋建築について考察を行うものである。各節においては博物館が設置あるいは博覧会が開催される経緯を示し、そこに数寄屋建築が設置される経緯を吟味する。またここでは移築されたもの、元からその場所にあったもの、あるいは新築されたもの、これらを等しく扱っていくものとする。

第５章では、明治期における数寄屋建築の動向を年表によって概略を把握し、明治10年代が近代数寄屋建築を把握する上で非常に重要な時期であることを示す。

第６章では、先に第４章で示した博物館あるいは博覧会において設置された数寄屋建築は古物保存の意味が見出されるのであるが、これについて吟味する。また博物館に設置された数寄屋建築は古物という意味を超えて、伝来を重視する茶の湯の道具のような古美術としての扱いを受けることになるのである。例えば、井上馨の八窓庵、あるいは原富太郎の三溪園などであり、次にそれらについて観察する。

そして最後には、これらより明治期における数寄屋建築の性格についてまとめる。明治期の数寄屋建築において、公の場所に設置されたものがその復興に少なからぬ役割を果たしていただろうことを示す。さらにわが国の住居史におけるこれらの意味として、それまで奥向きに用意されていた数寄屋建築が近代においては表側に現れ、またそれが書院造りに取って代わろうとする方向性、これはこれまでに示した数寄屋建築の動向と

性格が大きく影響したであろうということを示し、本研究の結びとしている。

こうした論考は資料の収集・分析の幅広い作業にたった研究であり、同時に社会との連関を追った検討は建築史学に新しい方法をもたらしたものでもある。近代数寄屋建築というわが国では現在ようやく研究が始まったばかりの、研究者の層の薄い分野における貴重な研究業績として、価値が高い。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。